「おもしろいア…だからな……知りあいの魔法アイテム評論家に見せてみよう。うまくいけば、『魔女術師名鑑』に、おまえの名前がのるかもしれん」

「ほ、ほんとう…！」

偉大な魔女と魔術師だけがのることができる『魔女術師名鑑』。そこに名前がならぶことは、わかい魔女、魔術師のあこがれだ。

「つぎか…つけてくれればいい」

そうい…アルはそとへでていった。ポプルもあわてて追いかける。ドアにカギをかけて、『昼…』の看板をかけておいた。

ポプル…にでると、アルは魔法をつかうところだった。

「わたしの名前はノーラ・シロ。『銀…ーラ』とよぶやつもいるな。王家親衛隊の隊長をやっている」

ミミ先生は、ほほえんだ。

「よい質問ですね。目には見えませんが、何千、何万といった魔力の流れが、この大地には存在しま…の流れは、血液がからだ中をめぐって心臓で合流するように、世界中をまわり、『光…わの国』で合流するのです」

それがあ…えだ。

「正確にいうと、『光…わの国』の聖アルベス山の頂上です。こ…には、魔力の川ができるほど、強大な…流れがあります。その壮大な光景は『す…しい』のひとことですよ」

ミミ先生は手帳に、ミーコさまが「光とあわの国」をおとずれたときに注意することをメモした。

「さて、つぎはこの国だけに生息する、ドラゴンについて勉強しましょう」

そ…ルガスからわたされた仮面だった。

『おま…このさき、けっしてあきらめないと誓えるか？』

ポプ…ルガスのことばを思いだした。そう、ここでポプルがあきらめてしまえば、ミーコ…ソトラたちまでやられてしまう。

ナナがきいた。

「大聖堂でおま…実力を知ったときだ。『国中さ…てもいない』、『おれ…るのに、気づかない…を知って…あるか』

『おれと…しくらい強い』。これだけヒン…

第2カギ
ふたえカギ
第2カギ
ふたえカギ
ふたえカギ
ふたえカギ
ふたえカギ
ふたえカギ